



和装本  
ホ 2  
1210

















Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 10 lines of characters.

Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 10 lines of characters.



丁亥年八月廿二日  
此書は松新考まじりて  
いふは松新の考まじりて  
まじりて松新の考まじりて

明治十六年八月

鈴木重光

玉の緒變格辨

黒川真頼 啓發

三田蓀光 傳述

本居宣長翁の玉をば紐鏡詞の玉の緒二つの書を著し  
きねて玉をはる神代よりおの緒つらまはれ言葉よそ  
かよるまゝその本来かふへあはするまゝなり何事か  
う小と記さよれしよりこのうへ今ふいふうて初學び  
のともがらまはれ二つ此書はたよりておろしくも玉  
をはるまゝのへきまはれ志を傳ふことなりきねるは玉のこゝ



まのふゆはくそいあまなれ 抄を蒸りてちかひのてふをばとをば言ふ  
 譯していと委しくと記ありては毛さるべき書はあねとされど何なりと  
 さくは名目ありて設けずとてかへりてはみよらりてとみよらり  
 やまらひ初めのさえたうよりつてはさるやさばりハ世は行 さいこの紐  
 をねばおしあてて紐鏡玉の法を乃し用ゆるあはるかまなり  
 鏡は三條の大綱をまて右行ハ左も 徒中行ハ左のや。何  
 左行ハ右と三種は分け定めその詞の結びとされ詞此  
 玉の緒はまらくくその證歌を挙げらるるふその定まらる  
 格はまらるるあててふをば調いむといふ近ぬ歌とも哉た  
 假り又變格と名づけられよりあのかと世人抑ハあふて  
 右歌を解くあま今よみゆるあてて一種の格ある毛乃と  
 んゆらくはたりまらるる川真頼大人のいへらくある変

格ふあはむもよる定まらる一ツの格ありさるはさげりのあ  
 いへども何ゆゑてふをばのかぎり始めて見あはるる免新ふ  
 かの三條の大綱をあみり傳はれむさるをらくのこと  
 志げまが中よりのあてて千慮の一失とやんまていさ考へ  
 りさるることどもまらるる無きふあはむり傳はるるつはるるふ  
 と記ありてむそのい 辞の本末かあはせ結びとて  
 んは一本の繫の種きハ末の結びも軽くゆとの繫の重きハ  
 す急の結びも重きとんあとおのづからなることさるるありき  
 指辭のともハ種き辭あればその結びとある辭もりぬ  
 するとやふ軽くそのやハ重き辭あるゆゑその結びも







ゆゑなりとふかゝる変格といふことわざありて疑ひおもしろし人  
 もたまや〜やまあり〜とされたとすつあるゆゑなりと考へたる人の心まじ  
 かりり記さるゝ義門法師あはれを疑ひてその著せる玉の指挿るゝ  
 云くこのその理りかゝり〜といひ難々れどおのづからある言靈の然る格を  
 見〜たりいゝ格といふべきもあはれ〜と人かゝるを〜と〜と〜と〜と  
 あれと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 見よのりり々れ する玉の緒を挙げ〜る 變格の一首す〜と  
 七十九首は申ふたもの指挿をぬるゝと 結ぶるゝ三首と  
 かゝるてせぬと結ぶる一首とつゝふに首のみよ〜とそれ  
 餘はあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 なる〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 一〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 こゝかあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 たり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

いづきと後人の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 仮字を〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ま〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 とも〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 どのの誤多きハ ま〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 さるゆゑぞう〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 十首の中あも八首は傳は徒の重格とて變格は異あるやと  
 あり又〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 なるん延〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 あぢ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ○今初巻のびのき〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 びを天秤に掛けあり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 なるん〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と











同六

くさくさあつちのつらねのちかやうなまはる

同日

くさくさあつちのつらねのちかやうなまはる

○

拾遺十五

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

後拾四

わづらわづらあつちのつらねのちかやうなまはる

同二十

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

金葉九

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

千載五

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

同六

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

新古今九

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

新後拾八

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

○

古今十五

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

○

後拾八

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

新古今七

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

統拾送三

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

源氏  
卷袴

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

○

後撰十九

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる

後撰十九

かきかきあつちのつらねのちかやうなまはる















拾遺十四

八百廿ゆく後のまふ砂とわがこゑと

いづき

まきわり

沖つぼる

菅家  
万葉下

をこあらがひげのうつふらる雪のたがふあは

いづき

たがつら

○

新載十四

卯花のかきねがくわのはらぎんまきまのびゆと

いづき

ほくぬ

五社百首

おらうまのつゆのちりのさねけけが社のこと

いづき

つゆき

○

金葉二

なれおの月やうやのゆまびよちのほろ

いづき

むすび

新古五

衣のり押とふつとふさつややうんのをを

いづき

おのつ

旧九

こやこをを杖のゆまぞまそめ

淀の川を踏

いづき

おへつ

新古四

なまばしれとる舟の櫂のちよ

いづき

杖を

つ

おの玉ばさ

新勅一

言砂のをのりきつとぶぬきばみやらのあき

いづき

へおとぬ

金葉四

ほろゆつとふさるれあくおふ

いづき

おのつ

新古七

年つとる雪の櫂のりこもむ

いづき

よふた

換衣

おのりこもむさるふ

いづき

みさる

玄集

舟のり

いづき

ふさる

新古二

いづき

いづき

あまねと

旧十四

いづき

いづき

ちぎら

元真集

さだぶらうてまきの下はもあつきぬ

おのつ

いづき

右に寄るいづきも何を種き方は結びる格あり



大いこれよ玉の緒よ重格とせしれよは徒の重格と  
何の輕格と二ツの定格なりと成るる所

○玉の緒四の卷何の部一ツの格とて出せば

金葉五

長後の言此數もなふある也つませばの部の君が代のふ

統後格

君が代のかぎよく屋バなふあるトあるの後に玉の部ありと

大和物語

なふむりり言くもあるずよのつの乃は延を部に玉の部あり

堀川百首

何ひんの所の言くもあるづれどまち一月日もなふあるぬれ

これを一ツの格といふれば玉の部の輕格と  
重格の部も兼けしり奇なりと云ふ玉をばあり

又是とある格は結びよかをもとてぬきつてぞ  
志ひてなりつる年れゆる事いづくもあらずとありとぞ  
引玉のやまのうつくささならあはるまじくもあらずとぞ  
けし玉の類の哥十五首を挙げられ又も文字にありは毛  
もとうくる意にて回どく結びよかつる哥五首の  
外一ツの何一ツの何とてむまじよかつる哥の玉も  
兼られり然いあれどその結びよかつる玉といつる  
もか何の輕格なりとあはらふとあるはさるる玉  
志る結びよかつる玉といつる類の玉とある玉とを  
ゆきつり何の輕格とせ玉とせ玉とせ玉とせ玉と



















なまきとてとてのたまきといひあぐらびあん

○又夏格は同じく不調哥の中

あぬ人をまつ秋風の森急い。これとてあぬ於旅とちさる さる

あゆざりよ人いんそん玉ばさふあひふ心此あくいのこと ぬ

は二骨いたの括辞をするのさぬと結びくるさあ

とのもてびきりめし書換あつてさるい世り傳りける

魚輔集の保字いと多うまは新拾遺集も保字の

まことねさるをさる又風雅集のいとのひれ

とらうらぬ二骨をも多くいんせとねばねとさる

河はさるふまらびあん

○壞格の辭はたうとてたつきぬといふて因てとどめまいるの。とが此輕重の征奇をいさうばくとま出で初学を示す

○のノ輕格 のノ重ハ常例の格とて詞の玉緒三轉証はよまよく挙げられ今載るに及ばず

古今四 まつ人は何ぬりのうう卯辰のなさあかあうのめづりき かふ

後撰二 春をあうちてやあぬさうりゆい辰のゆれうさるたは べ

拾遺十三 あがえゆる山座いしとあつおむつあさのすは春 かふ

金葉一 ちりつるさあまのさちして花は神のぬねぬ かり

千載六 玉ばさるは後のううさちとてさるさるのあ あり







日 ちんくはらふまじりあふんを里ちんくはらふまじりあふん あふん

○のノ輕ノ重格

古今四 杖を杖をさぐみあきてちん麻はあふんをさぐて杖の さやけさ

日十八 石のくさ家の杖常とねぞのちのひつきせぬ世の中 うさ

日序 さくむよありひつゝの あぢたあさ あぢたあさ あぢたあさ

日格五 あふはうりなすのちんわらゝを人めさるゝ まじりさ

日六 夕されば移まゆ杖のむさうて妻とひす かあさ

右の奇どもよての。うは輕と重と輕ノ重との三種ある  
あふ杖にさふ登一玉緒三の巻のノ部はくさくは

名目を分ちてうで多く載せらる中今ノノ輕格は  
挙げらるたがひをむいせられたる例とて其ノ奇は  
ひまはひるものありゆゑとこれとをひく  
みづうまひむむとていそれハ輕重の格ある  
こととて見せあらねざらうとたりとて

○文章の部

てふをばのさぐかうの文章とては終はことなることあぢた個の  
玉は終はいそれとてさぐその玉はは重格と名づけられ  
たる後ノ重格何の輕格とて是又異なるありとてさる杖



玉依文彦の部は云く古歌のそ書ぶるは「あつらふ春のち  
 けは時よみてなれる」梅の花をさるそ人よわたりけりよひ  
 上よぞのや何あとの辞たなれどよるりなかりわたりたりと  
 いふべき極多きをりといふは「〜くるといふはいつまといふまはさく  
 哥れを」書りそのあへかきそいつまのあつらふ常のそらめ  
 といふ事して語に切きても言に切きばしてやそそあつらひ  
 ちとといふれたれどもあはれ〜こふそ人かゝるもあつらひ又よある  
 ちとといふべき哥といふあやをさぬらよもあつらひを居るの  
 ち多極と名づけけりきるチヨハ「辞とおひ〜」徒の重極は極ひたる

そのなりそハ細注はさるせる「梅の花のちをさるる」梅は松は  
 かきる「初存をゆりる」梅のちをほせるなにもあふ極多きを  
 もてそあへ〜るるもあつらひとあつらひをさるるもあつらひ  
 ちと極多〜又「山里は郎と叫き〜」山は花のまほしき  
 「あつらひをさるる」女のをさるる〜たてりあつらひ徒の極多と  
 ちと極多〜そのおちきま事の〜ちよまかのち極多と名づけける  
 徒の重極何の極多〜あれども今いさ〜と出たよあつらひ

伊勢物語  
 「花の志多ひ三人とすむらう〜あつらひを影さてあつらひ  
 ちと極多〜あれ〜か〜あつらひ〜あつらひ〜とさして



























静岡縣士族  
三田 葆光  
東京下谷御徒町  
一丁目六十二番地

東京日本橋通四丁目  
金花堂  
須原屋佐太郎  
同浅草茅町二丁目  
青藜閣  
須原屋伊八

賣弘書肆

著述并出版人

明治十六年十二月三日出版法届

明治十四年此冬 本居雲嶺

人よ終つて... 書を...  
り玉後の... 書を...  
明治十四年此冬 本居雲嶺

静岡縣士族  
三田 葆光  
東京下谷御徒町  
一丁目六十二番地

東京日本橋通四丁目  
金花堂  
須原屋佐太郎  
同浅草茅町二丁目  
青藜閣  
須原屋伊八

賣弘書肆

著述并出版人

明治十六年十二月三日出版法届



